

「色とりどりの観覧車」

三日月てりり

## 第一話 茶の観覧車 地面

森の中の広場。板のチヨコレートをパキリと噛み砕いて「ウオオオオオ  
ンー！」と僕は吠えた。体がチヨコに侵食され、茶色い物質へと変貌を遂げ  
る。「ウア、ウオウアウイウウエウオー！」犬に近い形状の茶色い謎の動  
物になった僕は、すかさず吠え続け、周囲の生物を威嚇した。「ウオウ  
エー！」その主だった相手は人間であり、人間はチヨコレートを食べる。チ  
ヨコレートを僕以外の存在が摂取するなんて許せない！！「ウオウエウエウ  
アイー！」人は散り散りに距離をとっていく。それでいい。逃げ惑え。甘っ  
たるくなつた僕の口の中は今や天国であり、至福千年、徳川三百年、戦後民  
主主義数十年の様相を呈している。僕の口中は毎食後の歯磨きの度に「歯を  
磨く」という言葉が研磨の摩耗による歯の消耗及び行き着く果ての欠損へと  
イメージ化が成されて恐ろしくなるあまり、熱心に歯を磨けない日々に基づ  
く虫歯に蝕まれるわけで、恐怖の感情があらかた世間を薙ぎ倒し、僕を人外  
魔境の象牙の塔へと登らせた。口は歯を備え虫歯を誘発する。このことが恐  
ろしいし、歯科医椎名を主治医として指名しては、シイシイを爺爺（じいじ  
い）が知っていたし、恣意的な結論をもたらす物知り爺さんだったことが、  
あるようで、ありえない、試みの果ての四の死だったのだ。24X22。

地面から生えた歯は、虫歯の行き着く先が、顎まで達していると僕に告げ  
た。顎は二つに割れ僕の容貌を特徴づける主要な要素として僕の顔に備わっ  
ていた。顎は未来だ。ガクガクと受け口以上の長い物質として声の響きに影  
響を与え続ける。余は満足じゃ。低音の魅力を響かせる。倍音に次ぐ倍音で  
世界は振動する。世界は今共鳴によって震え、痺れ、音楽の一部となる。僕  
の叫び声は天下一品なのだ。

「凄いですけど」24X31。

語りかけてくる風がいる。そちらを睨むと何者かが僕の叫びによる効果か  
両耳を抑えながら近づいてくる。腹立たしい女め、人間としての形質を崩し  
てくれるぞ。僕は「ウオウアウオー！」と叫び、謎の人間の女に紫色の毒煙  
を吐きかける。「ケシヤアアッー！」叫んで前蹴りからの後る回し蹴り。犬  
による後る回し蹴りは体操の新難度と同等の技量だ、誇らしく叫ぶ「ウアウ  
オーンーンー！」

そして自らを狼へと変貌させ観覧車へと向かう。ラン、ララン、ララ  
ン、ラン。音楽が景色を茶色に染める。チヨコレートの甘ったるい苦味の色  
だ。同乗させた医師は僕への問診を始める。

「この観覧車は初めてですか？ 乗れば大抵の病は治ると噂の観覧車。実際  
はほんの少し状態がマシになる程度のものでして、奇跡のようなものではな

いのです。けれどあなたは受ける。治すためにできることは全てやってみる。形質を伴ったあなたの夢が、破れて潰えるところなんて見たくない」

変わった説明だったが、要は僕の顎が無くなり、顎無し人間になるであろう僕への讃歌なんだ。だからチヨコレイトを食べねばならぬ。それが礼儀というものだから。施術を受け、噛もうにも顎がなくなったので丸呑みと言う名の反則手を行ってしまったひとりぼっちの僕。僕の支配する世界ならそんなこともあるだろう。顎がなくなった僕の顔は変わったと皆が言う。なかなか見当たらないであろうこと請け合いの顔立ちだ。顎は見当たらなくなっても舌は残っているため、味覚は感じ取れたりもするんだよ。そう思いつつも、そんな話しかけ方はしないのが僕らしい僕であった。皆の気は僕からサーッと潮引かれて、孤独な人間へと僕は退行した。飴を舐めることが僕にとっての成功で、一つ飛びするも東京から出ることは望ましくないため、いつまでも山手線の内側に留まり続けるのだった。そうすることで、自分を生かし続ける。醜いものを見ないで済むんだ。汚れを落とす仕事を発注することが出来るんだ。それによって雇用は創出され、富裕層から飛び出た金銭をシャワーのように浴びた市民が掴み取り放題掴んでは懐に入れることになる。すると胡瓜だって、茄子だって、食べ放題になれるんだ。自由という名の羽ばたきは世界を制する。守護者が人々を守ってくれる、という訳だ。そこで作られたのが、甘党の僕に敬意を払い、いつまでも甘いものが食べられるようにとの願いを込められた、甘ったるいものを延々と映し出された映像作品だ。これは美味しそうな甘いものを映すことにより僕の口中から涎をダラダラと垂らさせるために作られた作品で、名前はまだ無い。仮に、×と呼んでおこうか、その映像作品を。決してJAPANなどは付かない、深淵たる×を。甘い×、たるい×、映像×。僕のお腹の中に備え付けられたモニターを、僕は服を捲くり上げることで前面に居る人々に見えるようにした。すると僕のお腹の前に少年少女、淑女と紳士、御老人方、森の動物達、医師、薬剤師、看護師、などが集まって来て、僕のお腹を覗き込むのだった。僕のお腹のモニターは、幕を上げ、さらなる舞台を映し出すと共に、飴を売り、緑色でゲル状の謎の物体を売り、舐めさせては吐き出させるのだった。

「さあさあ見ていってくださいませいゲル状の飴は200円、金粉まぶした煎餅は500円、貴重な代物だよ」

言うは易し、買うは難し。財布の紐は堅いのだ。堅牢堅固の僕の腹を割って見せると、中には甘いお菓子が詰まっていた。チヨコレイトなどというものから、飴、せんべい、などだ。汚れた手を拭いてからお菓子を摘んで口中へと放り投げる。予め用心して胃痛腹痛に効く薬を飲んでおいたおかげか、その後もなんともなく過ごせた。道行く人の群れに逆らって上流を目指すも、この先には虫眼鏡で見てやっと発見できるかどうかという難しいラインを超えて線引きされた非人類の世界が有った。だから僕はそこを粉々にしたくなってしまったんだ。

人間とは相容れない、異形の僕達が、戦う相手の人間が、僕の中で憤って

る。振る舞ってる。ダブルパンチを繰り出してゐるんだ。僕達私達はけん玉をしながら歩いていった。歩いて、歩いて、眠り猫の耳に僅かな吐息を吹きかけて、温めて、レンジでチンする人の心を取り戻すんだ。なんとまあ、ふざけたことだろう。暖かい風に包まれて、うたた寝する僕。暖房というものは有難いものなんだな。ゆっくりと瞼を開いてみては、自分が暖かいことに感謝する。ここはチヨコレートを食べなくてはいけないな。甘党の僕が辛党に変わったなんて、そんなありもしないデマを流された気がするけど、きつと気のせいだろう。開かない窓は開かないのだ。開かれたドアは自分の行き先とは違うミスリードの道なので無視しなければならない。甘党のテレビ番組がかつて有ったのに、僕はもはやそれを目にすることは叶わない。目が無ければ、ものを見ることなんてできない。僕は裏瞼に隠した眼球を急いで捲り返した。危なかった。そのままだったら永遠に僕の目は捲られ戻らされずに瞼の裏にこびりついたままだったろう。それを回避できたなんて、僕は小利口な上に器用だな。そして麗しいんだ。僕のこの様子は新たな甘党の動画としてネットやテレビを駆け巡った。そして憐れんでくれる大勢の人々が僕に歯と金とチヨコレートを送ってくれたのだ。あまりにオマリーで、僕の国籍が剥奪されたかのような夢を見た。僕はオマリーじゃない、オモローでも無ければトウモロでも無かった。送られた暖かさやチヨコを体内に落としてみ、歯を生やしては金を舐めた。舐めることは尊びなのだ。僕の味蕾には未来がある。予知能力？ そうかもしれない。間違った三角形で五頭分された感激に、僕はチヨコレートを等分し、発熱や喉の痛みを払拭しながら全人類にチヨコレートを分け与えた。すると、それは、途方もない量なので、皆が喜びつつも、困惑して、慌てふためいて、落ち零さないように足を八の字に踊らせた。すると、まるで祀られた神のようにして、蛸に不可思議な神霊の力が宿ってしまった。空に浮かんだ蛸を見ながら皆が取り囲んで落ち窪んで飛び跳ねて、祭りが始まった。

蛸を取り囲んだ盆踊りは、捧げられ、奉られて祀られた。松のつく名前の芸能人を始め、高貴な人達も喜んだ。僕は笑ったし、平等に喜んだ。燻んで煮られたし、間違いない信仰で天に昇って行った。

僕は笑うよ、新しい歯が見えて。僕は歌うよ、白く輝いて。感謝の歌に踊りをつけて、皆も真似して歌って踊る。さあ始めよう、終末を。どうぞ取り囲もう、蛸だった神を。60x60。9。INNOCENT。砂浜の潮騒。裸足であるくシルクスカートの君。ADIOS、夢。

## 第二話 青の観覧車 海

青い空、青い海、青い顔色、葵の御紋。

「会おう」

と、言ってくれた阿呆ことMr. Affordさん（米国人）は、日本に帰化したいと言いつつながら落雁を掴んでは口に入れる動作を繰り返して、一個も飲み込まずに頬を膨らませて口中に落雁が溜まったまま眠った。昼寝、というやつだろう。夜になる前に、窒息してしまうかもしれない。だが彼は海が好きだった。サーフボードをビート板代わりにして沖までチャプチャプ泳いでゆき、乗れもしないまま、乗ろうとして、片足を乗せた途端にボードと共にひっくり返って、ちょうどその時やってきていた鮫に飲まれて消えていった。もう会えないじゃないか、悔しいじゃないか。僕の中で驚き桃の木栗の木柿の木、生やしたいじゃないか、という感情と共に供養を願う気持ちが滲み出て来たのだった。しゅわわ、と聞くと、僕の心が漏れているな、と感じもするし、AffordさんとAffordさんとしての運命を全うしたのだなという気持ちもあって、飲まれた波か、飲んだ鮫か、鮫の悪魔なのか、ただの鮫なのか、昔の鮫なのか、七日の菜乃花なのか、さっぱり判らない。難しい解脱を終えた僕は、爽やかな紀行を味わえて、とても喜ばしい気持ちに泣き転んでしまった。僕の涙は一粒十萬円で売ることになっているから、零さないように、小瓶を目につけて、滴る雫を念入りに「売れてくれ、売れてくれ」と祈るのだった。そんな僕の前に娘の同級生のお母さんがやってきて、言った。

「世界の間に間にソーダ水。落雁の楽々オープンセール。津山の麓のおままごと風学園生活。それらはわらわの次に重要なこと。それ以上に大事なものは、わらわと娘のためならぬものならば、ひろひろ吹き込んで、ひろひろ、へろへろ、ぼろんぼろん。だから行くのでおじやります。選択しながらわらわら群がりまずでおじやります。じょじょんと、ジョンが、さららと沙羅の皿に尊崇の念を抱き、ジャンプジャンプとはしゃぎたてまつりまするんでおじやるまる。世界は斯様にこうなり申しておじやりまするんば。ける、ける」

有象無象の一言とは申せども、僕の肩に掛かったケープを広げては、僕は遠くへ匂いが移動するように難いで、振った。ひろひろと、さららと、振った。どうしても振った。振りたかったのだから。僕の意図を察してか、知らずか、天は地に舞い降りてしまう。青い空を地面にまで着けて、空気が全部青色になって、まるで違う世界みたい。動悸の激しくなった僕は、僕以外の人も青くなった世界に驚いている様を鑑賞し、僕の手柄だぞ、と思っは、人々の礼賛が望ましいのに僕には何の感謝も無いのだな、と落胆する気持ちにもなった。

「こんばんは」

やってきた恋人の兄の手を取り、僕は掬い上げられる。招き猫の手真似をして招く手招き人と瞬間成ったものの、人はあまり寄ってきてはくれないよかったです。

「こんばんは、トゥー。僕のためにまた助けに来てくれたんですか？」

「そうだね、ナイスボンボンだよ、助けたんだ、僕が。だから大いに感謝してくれたまえ。その気持を持ってくれたなら、僕はとてもいい気分のまま死

ねるんだ」

「まだ死なないでいて欲しいな」

僕はそう言つて、この兄への密かな気持ちをささやかに表明する。僕は恋人よりこの兄のほうが好きなのだ。彼と会う口実として恋人と親密になつたと言つてもいい。僕はその気持ちに、恋人は気づいていないフリをしてきているけれど、そんな彼女と僕はいつ破綻したっておかしくないし、そんな危うい均衡は、寧ろ早く破綻すべきなのかもしれない。

「お兄さん、僕の言葉から、この世界が破綻する軌む音が聴こえますか？」

終わつていく囁き、耳元ではっきり聞こえるのに、他の誰も気づくことの無い音。僕は常軌を逸してゐるのだろうかと自分を疑つてしまふのだけれど、お兄さんだけはわかつてくれるんじゃないかつて気がして、つい聞いてみてしまつているのだけど、どう思いますか？」

「夜は全て事もなし。終わりの始まりは仕方ない出来事であつて、君は何も気を咎めることなんて無い。何も気に病まず、自身の幸福を願い、生きられるだけ生き抜いて、世界を自分のものにしてやがればいいんだ。思いの儘、腕を振り回してやればいい。それだけでよ」

僕は兄から励まされた幸福を受け取つて、その兄を他の誰のものにもしたくは無いからつて、銃で一発、二発、撃ち抜いては血まみれの床を踏み、兄との絆の保つていた恋人を一発で仕留めると、僕の心根は死を選ぶべきだと主張し始めてきたので、ひっそり、ピチャピチャ、空と、海と、異星人だつた二人の青い血の色に塗れた青、水色、青色、吐息の色、ぐるぐるぐる、ぐるぐるぐる、回つた青、ひらひらひら舞つた青、カラクリ趣味でお眠の青パジャマを着て、夢の世界から帰還する。僕は9歳、夢の世界も青かつたよ、と、振り解かれるロープのような自分の運命の輪を、掴み、捨てて、一秒の王様になつた僕へと自ら献上した。さらば世界。さらば青色。

空翔ぶ魚達へ、別れの挨拶が終わつて、僕はぐるりと輪を書いてスタと着地し、空腹を満たすためのエリアへと動き出さなければならなかつた。だから僕は消えたんだ、この国から。異様な深さの青色を濃くしてゆき、僕の姿を求める者は、誰も僕を観ることができなくなつた。60x39。海に立つ、青い観覧車。それが僕だつた。

### 第三話 桃の観覧車 天国

甘い香りと液体の交錯、齧ると喉に落ちていく。皮はどうする？僕は丁寧に薄い皮を剥いでは中身にむしゃぶりつく。桃、それは果物。果物は芳しい。そうに決まつている。決まつているものだから、君に異論が有ろうと無かるうと、仕方ない。噎せ返るような強い桃の香りは、されど甘さが口から外へ大噴射されるのだった。僕は当事者だからうまく観ることが出来なかつ

たけど、きつと放射状にきれいな光景を人々は目撃できたんだろうな。僕は桃を食べた。噴射もした。それにかかった人達が居て、美形の人達だってそれに巻き添えになっていったようだ。

美形、とは言うものの、美人な男子やケツアルコアトルな女性、いや、コケティッシュな女性だって、居なくは無かった。僕の目の中に入ってきた数人だけでも、石化能力を持つ者だったり、人を狂わせる能力を持つ者だったり、色々だ。色々な人間、色々な差異があり、多様化を推し進められた分類上のレットルが一枚増えただけという気がしなくもないが、そんなふうにして理解できたかのような気がしている大人はきつと軟弱者だろう。明るい大地の端の日の出によって、僕の体は消毒された。吸血鬼やら化け物やらの血や成分が陽光で浄化されたわけなので、僕はまだずっと突っ立っている。歩くことなんかままならないし、もう歩かなくなっただけいいのかもしれない。くだらない世界に見切りをつけて死ぬことを望んでいる限り、僕に未来は来なくって、いつだって死んでいるのと同じなんだ。誰にもどうにも出来ない呪い。自分で作り出した、自分にも誰にも解けない呪い。それを、桃の香りは掴み、砕いた。砕かれたものはなんだったのか、もう判らない。ただ、桃の香りがするだけだ。僕が桃を薫る時、世界のことは僕には判らなかつた。それはラッキーなこと、ベッキーに会いたくて、マリリンには別に会えなくて良いのだった。世界の秘密が僕にはわからなくて、誰も何も分かつてないことなのだから、僕が僕を興して踊り戦うことなんてしなくて僕は、動いて、満ち足りた、月のように薄暗く輝くのだ。

僕には見える範囲がある。半径数キロメートルの桃色の観覧車。それに乗った僕は、窓から出られないか画策して、内側から鍵開けの技術を駆使して外に落ちそうになってしまった。ラッキーなことに、世界のことは僕にはわからない。だから内から開けた扉のことをもう閉める事が出来なくなっただけ、ついに身を挺して他の誰かが滑り落ちないように我先にと飛び降りてしまったのだった。上空十五メートルほどの高さから墮ちた天使。僕という天使は翼が無かつた。だから人と同じだけの傷を負って、痛い思いをしたし、外科内科などの医師たちの尽力を感じ取らざるを得なくなつた。見える範囲には真実がある。真実とは信用できないことと同義では無い。信じられる真実にたどり着くことがどうしても必要で、苦しいけれど、激しいけれど、疲れ切ってしまったけれど、僕の体力はもうとくに零を下回っている。だとしたら、僕の見える範囲の真実について思い出せることもあるかもしれないし、それを見失ってしまうくらい疲労しているのかもしれない。人間だからそんなことも出来たり、出来なかつたり、どっちでも良かったりする。

「カプセルのタワーはもう無くなつてしまつたな」

と言つて肩を落としてみると、河童が出てきてラッキーなことを感じさせてくれつつ、川の中へと引きずり込まれていく。宙空から大地へ、大地から川中へと誘われる僕の人生。ラッキーなことに観覧車は今でも動き続けている。扉が開いているのを見つけて中に居たはずの客である僕が落ちたのである。

うことをスヤスヤと休みながら寝ぼけつつ認識し、連絡し、僕のことを搜索するようになったのが世界の果ての始まりの時だった。見える範囲の天国の桃の観覧車が、桃色に塗り込められた甘い果汁いっぱい液体の観覧車で、天国に昇っていく。天へ、空へ、チョコを齧って。齧ったチョコは齧られたチョコであって、僕のチョコレートは楽に僕を生かしてくれる。生存の燃料がチョコレートでしかないことは、桃に取り憑かれた僕にとっては忸怩たる思いをさせる不思議な音色を奏するものだった。観覧車に桃が詰め込まれていて、扉が開いたことはいっぱい落ちてしまったのだけれども、僕の今居る川の中では、桃が手に入りづらい。桃太郎が流れてくれば良かったのに、犬も猿も雉も流れてきて、鬼も流れて浦島太郎も一寸法師も流れていったんだ。お婆さんも川に流れて行って、山から転落したおじいさんも芝と共に流れていった。残ったのは、吉備団子と、僕だけだ。僕は鬼ヶ島へと遡って行ってみた。金銀財宝が手つかずであったので全て頂いた。おじいさんとおばあさんの家も訪れ、金目のものは頂いた。それで僕は満足だ。桃を食べられたので満足だ。空の上に桃色の観覧車があるというだけの事実認定を聞きもせず、僕の心の中の桃の観覧車を舐めたり齧ったりして転落へと導いてしまった僕は、やはり桃の使いと言うに相応しいだろう。桃こそがあちこちの色の中で最も僕に相応しい色なのだ。

桃の果汁いっぱいの液体に浸されながら、僕は天国へと昇っていく。天へ、空へ、チョコを齧って。僕のチョコレートは楽に僕を生かしてくれる。神に面会させてくれる。神は桃に釣られて僕と会ってくれた。

「ねえ、神様、僕はどうして生きていて、どうやって生きていったらいいの？ 僕には何も分らない、僕が生きていくために努力しなければならぬのか、全く理解できないままなんだよ、そんな僕なのにどうやって日々を送っていったらいいのか、泣いて目を腫らして苦しい辛い思いをしても、僕はどうしたら生きてられるのか解らない。だから眠るよ。眠り潰してしまえば、僕が桃色を感じていない悲しい時間にだって、生存の喜びを夢として僕に与えてくれるから。それが僕に宿る神の恩恵だから。そう、僕の神は僕に物事の仕組みを解らせてくれる。ありがとう、神よ。あなたに会ったならば、きっと僕は、あなたに感謝の念をぶつけるだろう。そしてぶつけた感謝の念によって、物理的に可能な神の招待のあらましをつぶさに見取って、それから僕かあなたのどちらかが、真実を受け入れられずに砕け散ってしまうだろう。けれどその後、どちらか一方が残された者の役目として、神の座について世界を流転させていくだろう。喜びの、想いを胸に、変拍子で踊るんだ。変拍子で踊り続ける。変拍子で。」

幕は閉じていく、控えめな天使によって。幕が閉じても人生は続いていく、透明な天使によって。それらへの働きかけをした僕は、自分でも思いもかけない間に神として人間皆にセレンディピティを与えていたのかもしれない。40x46。そろそろ僕も眠らねば。神の休息だ。僕が眠ったらまた誰かが僕の代わりをするだろう。僕に訪れたささやかなセレンディピティを、人間

たちに還元して、僕は眠る。おやすみ、世界。おやすみ、この世の理を超えた闇の法則よ。僕が詣でる祝の時は明日で、その時までをカウントダウンして、僕はスヤスヤと眠るよ。心を切って、もうすぐだ。君も僕と踊ろう。眠りながら踊ろう。ほら、もうすぐその日が、その時が。やって来るから、僕は、終わりの時を貪って、みなにさらばと告げるんだ。さようなら世界、さようなら宇宙、全てのセレンディピティに感謝して、さあ、いまだ、最後だ……！

全てが終わった後、あなたがこの世界を観測できたとしたら、あなたは神になれたのです。そうできたならば、全てをあなたが決めて、善き世界を作ってくださいね。頑張ってください。さようなら。さようなら、あなた。

終